筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果（2004年度）

近藤　良享[1]・長谷川悦示[1]

Ⅰ．はじめに

スポーツ界のアンチ・ドーピング運動は世界的な規模の取り組みである。

国際社会に目を向けると、2003年3月5日、デンマークのコペンハーゲンにおいて、国際ドーピング会議か開催され、「世界アンチ･ドーピング規定」が各国の政府関係者、スポーツ関係者らによって批准された。この批准によって、これまでIOC（国際オリンピック委員会）やIFs（各国際競技連盟）が独自に行ってきたアンチ・ドーピングへの取り組みが、WADA（世界アンチ・ドーピング機構）の主導で行われ、しかも競技統括団体と各国政府とが一体となって取り組むことが決定された[1)]。

他方、日本国内においても、1999年にJADA（日本アンチ・ドーピング機構）が発足して、本格的なアンチ・ドーピング運動を開始し、2003年からは国民体育大会（静岡国体）[2)]においてもドーピング検査が導入された[3)]。

このように国内外のスポーツ界がアンチ・ドーピング運動をますます強化する方向にあることを踏まえ、国際的にも国内的にも日本のスポーツ界、大学スポーツ界を主導する筑波大学体育専門学群の学生が、どのようなドーピングに対する意識、考え方、現状であるかについて把握することが不可欠となっていた。そのため、2004年度の開始にあたって、本学体育専門学群生に対して、「ドーピング意識調査」を実施することになった。

以上のことから、本調査の目的は、筑波大学体育専門学群生のドーピング意識についての現状把握を行うと共に、調査への回答を通じて、本学群生のアンチ・ドーピングに対する意識向上を図ることを目的にした。また、他のアンチ・ドーピングに関する意識調査結果とも比較検討し、体育専門学群におけるアンチ・ドーピングへの取り組みについての基礎資料を得ることにした。

Ⅱ．調査方法

1．調査内容

「アンチ・ドーピングに対する意識調査」の質問は、所属競技団体名、性別、学年、競技レベルといった基礎項目に続き、ドーピングへの関心の度合い（以下、関心の度合い）、当該競技種目における禁止薬物が使用される可能性（以下、薬物使用の可能性）、ドーピングに対する信条（以下、ドーピング観）、ドーピング検査の方針や手順についての情報（以下、ドーピングの情報）、サプリメント摂取とドーピング違反の可能性（以下、サプリメントとドーピング）、ドーピング検査回数について、10の質問で構成された。

調査は以下のとおりである。

Q1　あなたが活動する競技種目名は？

Q2　あなたの性別は？　(1)男性　(2)女性

Q3　あなたの学年は？　(1)1年生　(2)2年生　(3)3年生　(4)4年生

Q4　あなたの競技レベルについて伺います。現在までにあなたが出場した最も高いレベルの大会はどれですか？　(1)オリンピック･世界選手権レベル　(2)全国大会レベル　(3)都道府県大会レベル　(4)市町村大会レベル　(5)その他（レクリエーション等）

Q5　ドーピング禁止薬物使用問題について、どのくらい関心がありますか？　(1)非常に関心がある　(2)かなり関心がある　(3)少し関心がある　(4)まったく関心がない

Q6　国際的に見て、あなたの競技種目で競技力向上のために薬物(ドーピング禁止薬物)が使用される可能性はどのくらいあると思いますか？　(1)使用される可能性は非常に高いと思う　(2)使用される可能性は高いと思う

1　筑波大学人間総合科学研究科

(3)使用される可能性はわからない　(4)使用される可能性は低いと思う　(5)使用される可能性はないと思う

Q7　競技力向上のための薬物(ドーピング禁止薬物)使用について、あなた自身の考えや気持ちを表現するものとして、以下のどの信条が最も適切だと思いますか？　(1)いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う　(2)状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う　(3)いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う

Q8　あなたはドーピング検査の方針や手順についてどのくらい情報を得ていますか？　(1)まったくなし　(2)少しある　(3)ある程度、得ている　(4)相当に得ている　(5)十分に得ている

Q9　あなたは栄養食品・エネルギー補助食品(サプリメント)の摂取がどのくらいドーピング検査の陽性(ドーピング違反)に結びつく可能性があると思いますか？　(1)可能性は大きい　(2)ある程度の可能性がある　(3)可能性は小さい　(4)可能性はまったくない　(5)わからない

Q10　あなたが、平成 15 年 1 月 1 日～12 月 31 日の間に受けたドーピング検査の回数は何回ですか？

２．調査手順および回収結果

実施方法については、以下の手順であった。1 年生は 2004 年 4 月 15 日のフレッシュマンセミナーの時間、2、3、4 年生は、2004 年 4 月 12 日の学年別クラス会議において、担任が調査目的を説明して、調査用紙を配布し、その場での回答もしくは後日の提出を指示した。後日の調査用紙の回収集期間は、2004 年 4 月 12 日から同 4 月 30 日までとした。

回収率は、1 年生の在籍数 257 名のうち 213 名が回答し、回答率は 83%であった。2 年生の在籍数 254 名のうち 227 名が回答し、回答率は 89%であった。3 年生の在籍数 249 名うち 173 名が回答し、回答率は 70%であった。4 年生の在籍数 301 名のうち 131 名が回答し、回答率は 44%であった。体育専門学群全体では、在籍者数 1061 名のうち 744 名が回答し、回収率は 70%であった。

３．分析方法

入力および統計処理は、プライバシーへの配慮から、業者に委託して個人が特定されないようにした。

III　結果ならびに考察

１．基礎集計結果

（１）所属競技団体数と回答者数：回答者が所属する競技団体数は 32 競技団体で、回答者総数は 744 名だった。

（２）性別：744 名のうち、男子学生が 517 名(69.5%)で、女子学生が 224 名(30.1%)で、無回答・不明が 3 名(0.4%)あった。

（３）学年区分：1 年生が 213 名(28.6%)、2 学年が 227 名(30.5%)、3 学年が 173 名(23.3%)、4 学年が 131 名(17.6%)であった。

（４）競技レベル：オリンピック・世界選手権レベルが 45 名(6.0%)、全国大会レベルが 401 名(53.9%)、都道府県レベルが 254 名(34.1%)、市町村レベルが 24 名(3.2%)、その他が 12 名(1.6%)、無記入が 8 名(1.1%)であった。

（５）関心度合い：「非常に関心がある」は、63 名(8.5%)、「かなり関心がある」は、224 名(30.1%)、「少し関心がある」は、420 名(56.5%)、「まったく関心がない」は 35 名(4.7%)、「無回答・不明」が 2 名(0.3%)であった。

（６）薬物使用の可能性：.国際的な視野からのドーピングの可能性について、「使用される可能性は非常に高いと思う」は、153 名(20.6%)、「使用される可能性は高いと思う」は、245 名(32.9%)と回答し、また、「使用される可能性はわからない」は、166 名(22.3%)、「使用される可能性は低いと思う」は、146 名(19.6%)、「使用される可能性はないと思う」は、31 名(4.2%)、「無回答・不明」が 3 名(0.4%)であった。

（７）ドーピング観：ドーピングについての信条として、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答したのは、552 名(74.2%)、「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」は、182 名(24.5%)、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う」は、7 名(0.9%)、「無回答・不明」は、3 名(0.4%)であった。

（８）ドーピングの情報：検査の方針、手順といったドーピング情報に関して、「まったくなし」

は、118 名(15.9%)、「少しある」は、366 名(49.2%)、「ある程度、得ている」は、173 名(23.3%)、「相当に得ている」は、26 名(3.5%)、「十分に得ている」は、11 名(1.5%)、「無回答・不明」は、50 名(6.7%)であった。

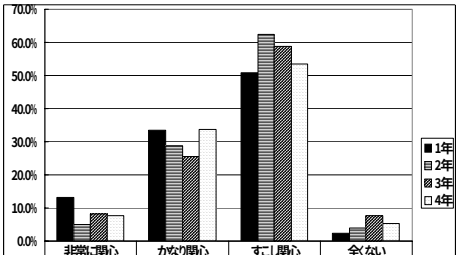
（９）サプリメントとドーピング：補助食品・サプリメントの使用によってドーピング検査で陽性となる可能性について、「可能性は大きい」と回答したのは、50 名(6.7%)、「ある程度の可能性がある」は、351 名(47.2%)、「可能性は小さい」は、195 名(26.2%)、「可能性はまったくない」は、24 名(3.2%)、「わからない」は、74 名(9.9%)、「無回答・不明」は、50 名(6.7%）であった。

（10）ドーピングの検査有無：平成 15 年 1 月 1 日～12 月 31 日の間に受けたドーピング検査の有無について、「ある」と回答したのは、23 名(3.1%)、「ない」が 665 名(89.4%)、無回答が 56 名(7.5%)であった。

２．質問項目の間の関連

それぞれの質問事項で、統計上、有意と判断できる関連には、①関心の度合いと学年、②関心度合いと競技種目、③薬物使用の可能性と性別、④薬物使用の可能性と競技種目、⑤薬物使用の可能性と競技レベル、⑥ドーピング観と学年、⑦ドーピングの情報と学年別、⑧ドーピングの情報と競技種目別、⑨ドーピングの情報と競技レベルであった。

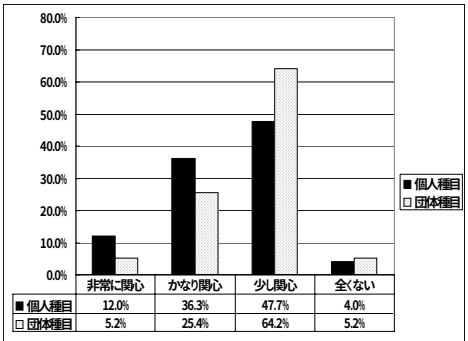
①関心の度合いと学年(表 1 の学年と図 1)：ドーピングに対する関心の度合いについて学年別の傾向を見てみると、最も関心が高いのが 1 学年であった。そして 2 学年、3 学年と若干関心の度合いが下がり、さらに 4 年生には再び関心の度合いが増すという傾向が見られる。特に、入学直後の 1 年生にとっては、高校生の時にはなかったと思われるドーピング関連の知識、情報を提供する機会を設けるべきであろうし、また、4 年生に対しては卒業後に指導者として競技に携わる学生もいると推測される。よって、1 年生や 4 年生に対しては「アンチ・ドーピング」関連の授業、セミナー、講演会などの開設が望まれる。



	非常に関心	かなり関心	すこし関心	全くない
1年	13.2%	33.5%	50.9%	2.4%
2年	4.9%	28.8%	62.4%	4.0%
3年	8.1%	25.6%	58.7%	7.6%
4年	7.6%	33.6%	53.4%	5.3%

図 1　関心の度合い：学年別

②関心度合いと競技種目（表 1 の競技種目と図 2)：同じく、ドーピングに対する関心の度合いについて、個人種目と団体種目別で分析すると、関心の度合いは、「個人種目」に携わる学生の方が、「団体種目」に携わる学生よりも高い傾向がある。



	非常に関心	かなり関心	少し関心	全くない
個人種目	12.0%	36.3%	47.7%	4.0%
団体種目	5.2%	25.4%	64.2%	5.2%

図 2　関心の度合い：学年別

表 1　「関心の度合い」についての回答

Q1.関心の度合い	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
非常に関心	8.5% 100.0	8.7% 71.4	8.0% 28.6	**13.2%** 44.4	**4.9%** 17.5	8.1% 22.2	7.6% 15.9	**12.0%** 67.2	**5.2%** 32.8	13.3% 10.3	9.3% 63.8	5.9% 25.9
かなり関心	30.2% 100.0	29.6% 68.3	31.7% 31.7	33.5% 31.7	28.8% 29.0	25.6% 19.6	33.6% 19.6	**36.3%** 55.9	**25.4%** 44.1	40.0% 8.5	28.5% 54.0	31.1% 37.4
すこし関心	56.7% 100.0	56.1% 69.0	58.0% 31.0	**50.9%** 25.7	**62.4%** 33.6	58.7% 24.0	53.4% 16.7	**47.7%** 39.7	**64.2%** 60.3	44.4% 5.0	57.5% 57.4	59.4% 37.7
全くない	4.6% 100.0	5.6% 85.3	2.2% 14.7	2.4% 14.7	4.0% 26.5	7.6% 38.2	5.3% 20.6	4.0% 40.6	5.2% 59.4	2.2% 3.4	4.8% 65.5	3.5% 31.0
合計	100.0% 100.0	100.0% 69.8	100.0% 30.2	100.0% 28.6	100.0% 30.5	100.0% 23.2	100.0% 17.7	100.0% 47.0	100.0% 53.0	100.0% 6.4	100.0% 57.2	100.0% 36.3
		χ^2値	4.30 ns	χ^2値	20.65 **			χ^2値	25.05 **	χ^2値	7.93 ns	

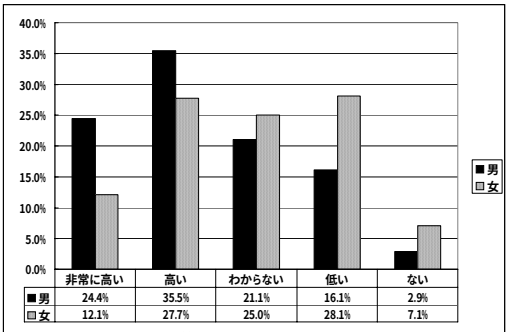
「非常に関心がある」と「かなり関心がある」を合わせたデータについて、個人種目と団体種目とを比較すれば、個人種目が 48.3%で、団体種目が 30.6%となり、20%近くの差が出ている。やはり、過去のドーピング違反例に、重量挙げ、レスリング、陸上競技や水泳競技といった個人種目が多く見られることから、個人種目の方がドーピング問題に対して高い関心を示していると推定される。別の視点で、個人種目にドーピング違反者が多いことからすれば、特に個人種目に携わる学生に対して、アンチ・ドーピング教育が必要と言えるだろう。

③薬物使用の可能性と性別（表 2 の性別と図 3）：自らが行う競技種目において、薬物使用の可能性を問う質問に対して、男女間で明確に意見が分かれる結果となった。男子学生が回答した「非常に高い」(24.4%)と「高い」(35.5%)を合計するとほぼ 60%の男子学生が薬物使用の可能性を疑っている。その一方で、女子学生が回答した「非常に高い」(12.1%)と「高い」(27.7%)の合計がほぼ 40%であることから、女子学生の方が比較的薬物使用の可能性を低く見ているという結果となっている。

旧東ドイツでは、女子競技にドーピングの効果が高いことから、組織的、集中的に女子の陸上競技選手と水泳競技選手を強化していたと伝えられている。ドーピングが女子選手に効果的であると言われていることからすれば[4)]、女子競技に関わる指導者、スタッフを含めた女子選手へのアンチ・ドーピング教育が特に重要であると考えられる。

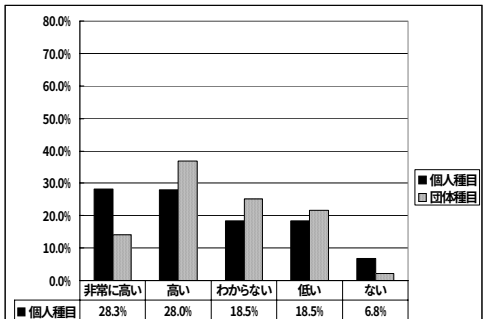
④薬物使用の可能性と競技種目（表 2 の競技種目と図 4）：国際的な視野からの薬物使用の可能性と競技種目とのクロス集計では、上記の②の関心の度合いと同じく、個人種目の選手が団体種目の選手よりも薬物使用の可能性を高く見ていることがわかる。特に、個人種目の「非常に高い」(28.3%)は、団体種目の「非常に高い」(14.2%)と比べて 2 倍もの差が見られる。上記でも述べたが、過去のドーピング違反例に個人種目が多いことから、薬物使用の可能性を強く疑っていると推察される。

⑤薬物使用の可能性と競技レベル（表 2 の競技レベルと図 5）：同じく薬物使用の可能性について、競技レベル別（オリンピック・世界選手権レベル、全国レベル、都道府県レベル）において顕著な結果が出ている。すなわち、オリンピック・世界選



	非常に高い	高い	わからない	低い	ない
■男	24.4%	35.5%	21.1%	16.1%	2.9%
□女	12.1%	27.7%	25.0%	28.1%	7.1%

図 3　薬物使用の可能性：性別

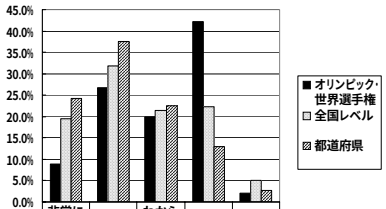


	非常に高い	高い	わからない	低い	ない
■個人種目	28.3%	28.0%	18.5%	18.5%	6.8%
□団体種目	14.2%	36.9%	25.1%	21.6%	2.2%

図 4　薬物使用の可能性：競技種目別

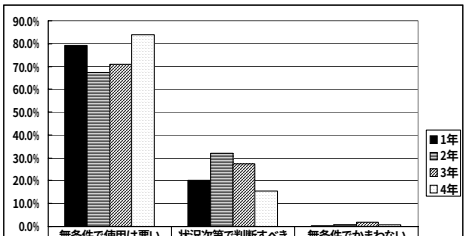
表 2　「薬物使用の可能性」についての回答

Q2.薬物使用の可能性	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
非常に高い	20.7%	**24.4%**	**12.1%**	17.5%	23.0%	21.5%	20.6%	**28.3%**	**14.2%**	**8.9%**	19.5%	24.1%
	100.0	82.4	17.6	24.2	34.0	24.2	17.6	63.9	36.1	2.8	54.5	42.7
高い	33.1%	**35.5%**	**27.7%**	30.8%	33.2%	35.5%	33.6%	**28.0%**	**36.9%**	26.7%	31.8%	37.5%
	100.0	74.7	25.3	26.5	30.6	24.9	18.0	40.3	59.7	5.1	54.3	40.6
わからない	22.3%	21.1%	25.0%	24.6%	22.6%	21.5%	19.1%	**18.5%**	**25.1%**	20.0%	21.5%	22.5%
	100.0	66.1	33.9	31.5	30.9	22.4	15.2	39.5	60.5	5.9	56.6	37.5
低い	19.7%	**16.1%**	**28.1%**	20.4%	15.9%	19.2%	26.0%	18.5%	21.6%	**42.2%**	22.3%	**13.0%**
	100.0	56.8	43.2	29.5	24.7	22.6	23.3	43.2	56.8	13.5	63.1	23.4
ない	4.2%	**2.9%**	**7.1%**	6.6%	5.3%	2.3%	0.8%	**6.8%**	**2.2%**	2.2%	5.0%	2.8%
	100.0	48.4	51.6	45.2	38.7	12.9	3.2	73.3	26.7	3.6	71.4	25.0
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	100.0	69.7	30.3	28.5	30.5	23.2	17.7	47.0	53.0	6.4	57.3	36.2
		χ^2値	33.63 **	χ^2値	16.56 ns			χ^2値	33.23 **	χ^2値	27.50 **	



	非常に高い	高い	わからない	低い	ない
■ オリンピック・世界選手権	8.9%	26.7%	20.0%	42.2%	2.2%
□ 全国レベル	19.5%	31.8%	21.5%	22.3%	5.0%
▨ 都道府県	24.1%	37.5%	22.5%	13.0%	2.8%

図５　薬物使用の可能性：競技レベル別



	無条件で使用は悪い	状況次第で判断すべき	無条件でかまわない
■ 1年	79.2%	20.3%	0.5%
□ 2年	67.3%	31.9%	0.9%
▨ 3年	70.9%	27.3%	1.7%
□ 4年	83.8%	15.4%	0.8%

図６　ドーピング観：学年別

手権レベルの学生が、「薬物使用の可能性が低い」(42.2%)と回答したことが特筆に値する。この点については、競技レベルが高いほど、「薬物使用の可能性が低い」と考えていることになり、世界トップレベル選手に対する競技外ドーピング検査、競技会のドーピング検査の厳格さに、薬物使用の可能性を低く見ていると推察できる。国際レベルでのアンチ・ドーピング運動の成果が出ていると言える反面、まだ国内レベルのアンチ・ドーピング運動が不十分ではないかと推測できる。世界各国から日本におけるドーピング検査数の少なさに対する批判があることも認識しなければならない。

⑥ドーピング観と学年(表３の学年と図6)：ドーピングについての信条を尋ねたものであるが、1年生と４年生と２年生と３年生では回答の傾向が異なっている。すなわち、1年生と４年生ではドーピングは無条件でいけないことが８割を超えているのであるが、２年生と３年生では若干低く約７割にとどまっている。さらに、「状況次第で判断すべき」が３割前後を示している結果を重大に受け止める必要がある。潜在的なドーピング願望があるのではないだろうか。これらの結果について、その理由を推測することは難しいが、どのような条件であれば、「状況次第で判断すべき」と認められるかについての追加検証が必要であろう。

⑦ドーピングの情報と学年（表４の学年と図7)：ドーピングの情報について聞いた項目のうち、学年別に特徴が見られた。すなわち、1年生がドー

表３　「ドーピング観」についての回答

Q3.ドーピング観	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	１年	２年	３年	４年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
無条件で使用は悪い	74.5% 100.0	73.1% 68.4	77.7% 31.6	**79.2%** 30.5	**67.3%** 27.6	70.9% 22.1	**83.8%** 19.8	75.4% 47.9	73.2% 52.1	91.1% 7.9	73.7% 56.5	72.8% 35.6
状況次第で判断すべき	24.6% 100.0	25.6% 72.5	22.3% 27.5	20.3% 23.6	**31.9%** 39.6	27.3% 25.8	**15.4%** 11.0	23.7% 44.8	26.0% 55.2	8.9% 2.3	25.3% 58.7	26.4% 39.0
無条件でかまわない	0.9% 100.0	1.4% 100.0	0.0% 0.0	0.5% 14.3	0.9% 28.6	1.7% 42.9	0.8% 14.3	0.9% 50.0	0.8% 50.0	0.0% 0.0	1.0% 66.7	0.8% 33.3
合計	100.0% 100.0	100.0% 69.7	100.0% 30.3	100.0% 28.6	100.0% 30.5	100.0% 23.2	100.0% 17.6	100.0% 47.1	100.0% 52.9	100.0% 6.4	100.0% 57.2	100.0% 36.4
		χ^2値	4.16 ns	χ^2値	17.22 **			χ^2値	0.51 ns	χ^2値	7.21 ns	

表４　「ドーピングの情報」についての回答

の情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	１年	２年	３年	４年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
全くない	17.1% 100.0	19.0% 78.0	12.4% 22.0	**29.0%** 49.2	**10.3%** 18.6	15.8% 20.3	**11.1%** 11.9	**11.9%** 32.7	**21.7%** 67.3	**7.3%** 2.7	15.9% 54.5	20.0% 42.7
少しある	52.9% 100.0	53.2% 70.2	52.2% 29.8	50.0% 27.3	54.2% 31.7	52.6% 21.9	55.6% 19.1	**48.5%** 43.1	**56.9%** 56.9	**36.6%** 4.4	52.0% 57.8	54.5% 37.8
ある程度得ている	24.7% 100.0	23.4% 66.1	27.8% 33.9	**17.5%** 20.5	**31.3%** 39.2	23.7% 21.1	26.2% 19.3	**29.4%** 57.1	**19.6%** 42.9	34.1% 8.4	26.0% 58.7	23.4% 32.9
相当得ている	3.8% 100.0	3.1% 57.7	5.3% 42.3	2.5% 19.2	2.8% 23.1	5.3% 30.8	5.6% 26.9	**7.3%** 84.6	**1.2%** 15.4	**12.2%** 19.2	4.5% 65.4	**1.7%** 15.4
十分に得ている	1.6% 100.0	1.2% 54.5	2.4% 45.5	1.0% 18.2	1.4% 27.3	2.6% 36.4	1.6% 18.2	**3.0%** 81.8	**0.6%** 18.2	**9.8%** 36.4	1.6% 54.5	0.4% 9.1
合計	100.0% 100.0	100.0% 69.8	100.0% 30.2	100.0% 28.9	100.0% 30.9	100.0% 22.0	100.0% 18.2	100.0% 47.0	100.0% 53.0	100.0% 6.3	100.0% 57.7	100.0% 36.0
		χ^2値	7.91 ns	χ^2値	38.84 **			χ^2値	37.51 **	χ^2値	35.94 **	

表５　「サプリメントとドーピング」についての回答

	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	１年	２年	３年	４年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
可能性は大きい	7.2% 100.0	7.2% 70.0	7.2% 30.0	8.5% 34.0	7.5% 32.0	4.6% 14.0	7.9% 20.0	8.3% 53.2	6.5% 46.8	9.8% 8.3	6.9% 54.2	7.7% 37.5
ある程度の可能性がある	50.6% 100.0	50.5% 69.7	50.7% 30.3	42.0% 24.0	55.1% 33.7	55.9% 24.3	50.0% 18.0	53.8% 50.0	47.8% 50.0	31.7% 3.9	52.0% 59.2	51.9% 36.9
可能性は小さい	28.0% 100.0	27.5% 68.6	29.2% 31.4	29.0% 29.9	26.6% 29.4	26.3% 20.6	31.0% 20.1	24.8% 42.1	30.2% 57.9	41.5% 9.3	28.6% 59.0	24.7% 31.7
可能性は全くない	3.5% 100.0	3.3% 66.7	3.8% 33.3	5.0% 41.7	3.7% 33.3	1.3% 8.3	3.2% 16.7	4.3% 61.9	2.3% 38.1	9.8% 16.7	2.7% 41.7	4.3% 41.7
わからない	10.7% 100.0	11.4% 74.3	9.1% 25.7	15.5% 41.9	7.0% 20.3	11.8% 24.3	7.9% 13.5	8.9% 37.5	13.2% 62.5	7.3% 4.5	9.8% 55.2	11.5% 40.3
合計	100.0% 100.0	100.0% 69.8	100.0% 30.2	100.0% 28.9	100.0% 30.9	100.0% 22.0	100.0% 18.2	100.0% 47.0	100.0% 53.0	100.0% 6.3	100.0% 57.7	100.0% 36.0
		χ^2値	0.97 ns	χ^2値	19.00 ns			χ^2値	8.07	χ^2値	13.38 ns	

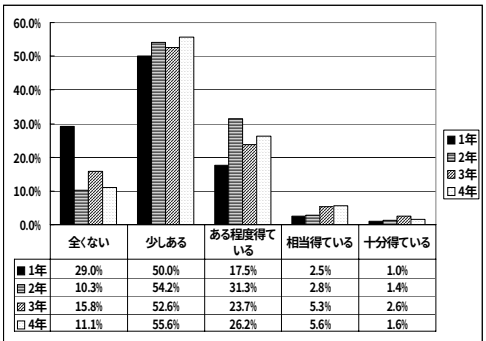


図７　ドーピングの情報：学年別

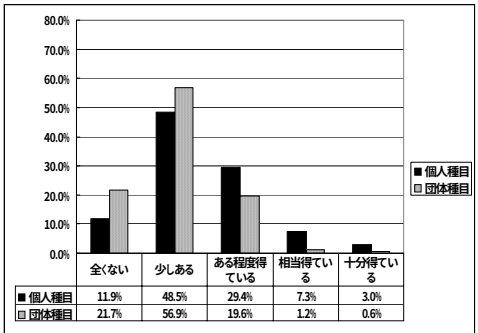
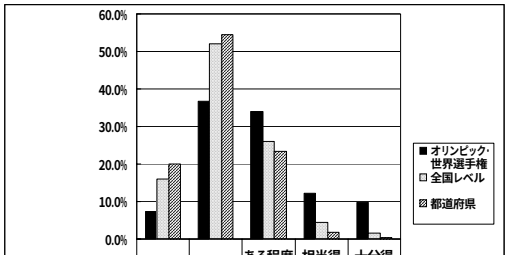


図８　ドーピングの情報：競技種目別

ピングに関する情報、例えば検査方法、手順などについては３割の学生が「全くない」と回答している点である。これまで日本において高校生レベルの競技大会においてドーピング検査は皆無であり、昨年から国体でわずかな検体数(50 検体）で開始されたところである。保健や健康教育における薬物乱用問題との関わりで、高校生レベルでのアンチ・ドーピング教育の必要性を物語るデータと判断できるだろう。さらに、学年が進行しても半数以上の学生がドーピングに関する情報が「少しある」程度であることから、大学レベルでの情報提供の重要性も、同時に示されているだろう。

⑧ドーピングの情報と競技種目（表４の競技種目と図８)：ドーピングの情報について、個人種目と団体種目についての違いに着目した結果である。その結果から、個人種目と団体種目との情報提供については、個人種目の方が団体種目より比較的多くの情報を得ていることがわかる。世界のドーピング違反者が個人種目に多い点からすれば、個人種目へのアンチ･ドーピングの啓蒙活動が進み、逆に団体種目に関しては、ドーピングに対して比較的安易な取り組みであると推察される。それは競技中のドーピング検査にも現れ、例えばＪリーグサッカーの場合にはベンチ登録の 16 名の選手の内、2 名が抽出される方法が実施され、全員の検査が行われていない。検査の経費面を度外視して、全員を検査する体制になれば、さらに「アンチ・ドーピング」意識の向上につながると考えられる。

⑨ドーピングの情報と競技レベル（表４の競技レベルと図９)：競技別のデータは、当然ながらオリンピックや世界選手権に出場するような高いレベルの選手と国内大会のレベルとでは情報提供に大きな差が生じていた。しかし、国際レベルであっても全くないとか少しあるといった回答も４割以上あり、この点は重大に受け止めなければならない。国際的な競技大会の場でのドーピングスキャンダルは､日本全体の不名誉となるだけではく、選手自身の優れたタレントも葬り去られてしまう可能性があるし、国内の競技大会であっても、今後ドーピング検査の強化が予想されることから、無知ゆえのドーピング違反を防ぐ手だてを早急に講じる必要があろう。



	全くない	少しある	ある程度得ている	相当得ている	十分得ている
■ オリンピック・世界選手権	7.3%	36.6%	34.1%	12.2%	9.8%
□ 全国レベル	15.9%	52.0%	26.0%	4.5%	1.6%
▨ 都道府県	20.0%	54.5%	23.4%	1.7%	0.4%

図 9　ドーピングの情報：競技レベル別

3．日本のトップアスリートの調査結果と体育専門学群との調査の比較

今回の調査には、平成 15 年度に行った日本アンチ・ドーピング機構の事業で実施された「日本のトップアスリートを対象とするアンチ・ドーピングに関する意識調査」[5)] と同一の質問事項が含まれている。JADA の調査対象は、JOC（日本オリンピック委員会）強化指定選手および JADA 加盟団体選手という日本のトップアスリートを対象としたものである。「関心の度合い」、「ドーピングの可能性」、「ドーピング観」、「ドーピングの情報」、「サプリメントとドーピング」という質問は、体育専門学群生への質問事項と同一である。詳細な検討は別稿に譲るとして、両者を比較して特徴を引き出してみる。なお、以下、JADA の「日本のトップアスリートを対象とするアンチ・ドーピングに関する意識調査」を「JADA 調査」、また、筑波大学体育専門学群学生を対象とした調査を「体専調査」とする。

両者の調査結果を比較すると、2 つの点に特徴がみられた。

1）ドーピング観

「JADA 調査」と「体専調査」を比較してみると、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答した選手・学生は、「JADA 調査」が 87.7%であり、「体専調査」が 74.2%であった。また、「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」は、「JADA 調査」が 11.4%、「体専調査」が 24.5%であった。さらに、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う」に関して、「JADA 調査」は 9 名(0.6%)、「体専調査」は、7 名(0.9%)いた。

この調査との比較から、体専学生は、日本代表レベルの選手に比べると、ドーピングに関与しないという意識が低いのではないかと推察されると同時に、「ドーピングはかまわない」とする回答が、両調査各々で 9 名と 7 名いることも、今後のアンチ・ドーピング教育の重要な課題となるであろう。

2）ドーピングの情報

検査方針、手順といったドーピングについての情報に関しては、予測していたよりも情報伝達方法に問題点の多いことが判明した。

それぞれの結果は、「JADA 調査」では、「まったくなし」(8.8%)、「少しある」(29.0%)、「ある程度、得ている」(40.4%)、「相当に得ている」(12.2%)、「十分に得ている」(9.5%)であったし、「体専調査」では、「まったくなし」(15.9%)、「少しある」(49.2%)、「ある程度、得ている」(23.3%)、「相当に得ている」(3.5%)、「十分に得ている」(1.5%)であった。

両者を比較すれば、明らかに、JOC 強化指定選手や JADA 加盟団体選手への情報提供は、体専学生よりは比較的行われているといえるだろうが、日本を代表する選手たちの中に、「まったくなし」(8.8%)、「少しある」(29.0%)を合わせると、40%近くもあることから、未だに必要かつ十分なドーピングに関する情報提供が行われていない状況と判断される。また、体専学生への情報不足は深刻で、「相当に得ている」(3.5%)、「十分に得ている」(1.5%)であることから、学生へのドーピングに関する知識、情報をどのように提供していくかの対策が求められるだろう。WADA の活動が本格化する 2004 年アテネ五輪以降は、日本国内・国外において競技外検査が強化されると予期され、無知による無意図的なドーピング違反が発生するのではないと危惧される。

Ⅳ．今後のアンチ・ドーピング普及・啓発活動への提言

筑波大学体育専門学群生への「アンチ・ドーピングの意識調査」および JADA 調査との比較検討から、今後の日本のアンチ・ドーピング教育の課題、さらには本学体育専門学群の課題を引き出してみよう。

まず、ドーピング観について、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答した体専学生が、JADA 調査の選手ら

よりも 15%も下回っているし、同じく「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」が 10%以上も上回っていることから、やはりドーピング問題への正しい理解、信条が不十分ではないかと懸念される。前述したが、「ドーピングはかまわない」とする回答も 10 名ほどおり、今後のアンチ・ドーピング教育の重要な課題となるであろう。

次の課題としてあげられるのは、ドーピングに関する知識・情報をどのように提供するかという問題ある。調査結果からみれば、やはり体専学生に比べれば、日本代表選手らのアンチ・ドーピング意識は相当に高いレベルにあったが、情報提供が十分に得ていると回答したのが 10%に満たないことから、選手へのアンチ・ドーピング教育、啓蒙が十分であるとは言えないだろう。特に、世界のアンチ・ドーピング活動が WADA を中心にますます活発化すると同時に、規則の改定、禁止薬物の追加・削除等の改訂も頻繁になることが想定される以上、最新のドーピング関連情報を定期的に、各競技団体はもとより、現場で直接指導にあたるコーチ・スタッフへの伝達も不可欠だろう。無知によるドーピング違反は選手生命に響く重大な過失となる。未然に防ぐ方法がある以上、できる限り速やかに情報が届くようなシステムを策定する必要がある。

特に、筑波大学体育専門学群生を初めとする体育・スポーツ系の大学生に関しては、選手としてだけではなく将来の指導者としても、アンチ・ドーピングの意識レベルを向上させなければならない。教育機関の責任として、体育・スポーツ系の大学生には、顧問教官、コーチィングスタッフといった課外活動担当者だけに依拠するのではなく、例えば、教育課程の中に「アンチ・ドーピング」といった授業科目を開設したり、教育課程の時間外の運動部活動においても、アンチ・ドーピングのセミナー、講演会、などを積極的に実施、支援することが必要であろう。アンチ・ドーピングには、まず「教育」が重要であることは周知の事実である[6)]。

この研究は、平成 16 年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(B)(2)一般、課題番号：14380010、研究代表者：近藤良享の一部である。

引用・参考文献

1) 近藤良享・畑孝幸(2003)：世界ドーピング会議に参加して、体育・スポーツ哲学研究 25(1):59-64.
2) （財）日本体育協会(2003)：2003 国体ドーピング検査選手必携書
3) 近藤良享(2004)：アンチ・ドーピング運動の今後、pp.21-31. 近藤編著『スポーツ倫理の探求』大修館書店：東京
4) 長井・柳澤(1996)：薬まみれの英雄たち、メトロポリタン出版：東京、pp.68-70.
5) （財）日本アンチ・ドーピング機構倫理・教育委員会(2003)：日本のトップアスリートを対象とするアンチ・ドーピングに関する意識調査～第 1 報、平成 15 年度日本アンチ・ドーピング機構調査研究報告書、pp.1-17.
6) （財）日本オリンピック委員会(1999)：アンチ・ドーピングガイドブック、pp.35-38.